

2014（平成 26）年度 映像研究科アニメーション専攻 修士小論文/制作記録

ドキュメンタリーとしてのアニメーション
Animation as documentary film

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 3213359

幸洋子/Yoko YUKI

指導教員 山村 浩二

2015 年 3 月 16 日

目次

修士小論文「ドキュメンタリーとしてのアニメーション」

要旨／Abstract	3
序論 アニメーションではっとさせられえたい	4
第1章 修了制作『ズドラーストヴィチェ！』	4
1-1 制作のきっかけ	4
1-2 どんな街、どんな人、どんな生活	4
1-3 ロシア好きなおじさんとの出会い	6
1-4 いろいろなおじさんとの出会い	11
1-5 家を探しにいく、家に不満を持つこと	13
1-6 ロケハン、スケッチ、リサーチ	14
1-7 現在の環境に身を委ね作品を制作すること	15
1-8 ドキュメンタリーについて	16
1-9 制作の進め方	16
第2章 一年次制作『黄色い気球とぼんの先生』	17
2-1 制作のきっかけ	17
2-2 取材	17
2-3 記憶の曖昧さ	17
結論	20
謝辞	20

制作記録「ズドラーストヴィチェ！ / Zdrastvuite!」

1. 素材作り	24
2. アニメート、撮影	25

題目 ドキュメンタリーとしてのアニメーション

Title Animation as documentary film

要旨：

実際に体験したことを元に制作する。何を魅力に感じ、なぜ人に伝えたいと感じたのかを考察する。

Abstract:

The animation I directed is based on my own experience. I will consider what I felt attracted by, and why I wished to share it.

序論 アニメーションではっとさせられたい

作品を見るとき、何を楽しみにしているか。落ち着いて感動できる作品も見たいが、共感よりも違和感を感じるものをみて、自分の今まで経験し得なかった感覚を体験し、へえ！という気持ちが強い。自身が制作するときは、遊びで気軽に撮ったインスタントカメラの現像を楽しみにするような女子高生的な気持ちでもある。

第1章 修了制作『ズドラーストヴィチェ！』

1-1 制作のきっかけ

修了制作に何をするのかとても迷っていた。一年次制作のように、自分の思い出をもとに制作をするのか、創作話にするのか、原作があるものを使ってやるのか、修了制作企画発表プレゼンまで一週間きっていたが、まだ企画が決まっていなかった。毎日企画を変えては山村先生に相談をしに行き、昨日よりはいいかもね、でもねえ〜といった感じであった。

一年次では自分の記憶で、自分のナレーションで、というように自分というものが全面に出ていたので、自分以外の人の記憶や話などを取り入れて、作品世界の広がりを出したかった。そこで思いついたことは、いろいろな人のドキュメンタリーをつなげて自分の話にするとか、街のいろいろな音をサンプリングして、そこから形作っていくということ等だった。もう部屋にこもってパソコンに向かい合っても何も思いつかない…コンテを進めている人もチラホラいる…焦りで気が狂ってしまいそうだったので、録音機材を片手にとりあえず外に出ることにした。

1-2 どんな街、どんな人、どんな生活

まず学校周辺を散策して、何があるのか、どんな人がいるのかを観察してみることにした。最初に目に入るのは目的を持ってこの場所を訪れている観光客だ。学校から少し歩くと赤レンガ倉庫や中華街、みなとみらいの遊園地等があるので、きっと全国様々な場所から様々な人が観光に訪れているだろう。実際、Facebook 等や instagram 等の SNS で友人がこの付近に遊びに来たという投稿をよく見かける。学校の周りは年中観光客だらけだ。

クリスマス前は特にすごい。この街は新しさと古さ、きれいさと汚さが極端なほどに差を置いて共存している変わった街だと思う。

馬車道周辺と元町周辺には歴史的建造物がまだ残っており、それらをまた別の形として使用している。例えば、赤レンガ倉庫はもともと 1911 年に建てられた、全長 150m の煉瓦造建築で、通関手続き前の輸入品を保管する保税倉庫だったが、今はショッピングモールや展示スペースとなっている。そして 1929 年に建てられた旧富士銀行が東京藝術大学の校舎になっていたりする。

一方、みなとみらいの周辺は、青い空に、まだま新しい、似通ったビルがによきによきとそびえ立っているのも、CG で合成をしたような偽物の街に見える。夜景がきれいで休日は賑わいを見せていることとは裏腹に、平日は人が極端に少ない。たまに家まで歩いて帰ることがあるが、みなとみらい-横浜間の真夜中は、ほとんど人がいない。デパートやオフィス街なので人の住んでいる気配も何もなく、普通これだけビルのあるところだと、夜中まで営業している店があったり居酒屋の一つくらいあっても良さそうだが、この世には人がいないのではないかという錯覚に陥るほど誰もいないのである。都会なのに辺鄙な田舎みたいだ。

そんなみなとみらいとは違って、馬車道を拠点としてみなとみらいとは違う方向に行くと、生活臭の溢れる街がある。パチンコ店、風俗店飲食チェーン等の立ち並ぶ繁華街 “伊勢佐木モール” や、日雇労働者が宿泊するための「ドヤ」という簡易宿泊所が 100 軒以上立ち並ぶ「ドヤ街」と呼ばれる“寿町”、川沿いに風俗街が並んでいたが今はほぼ取り締まられ、アーティストや地域住民等が制作をする拠点となっていたり、横浜トリエンナーレの会場にもなっている“黄金町”、戦後、水上生活者が多く生活していた大岡川周辺にはゲイバーやストリップ劇場などもある。私も近場の銭湯に入ろうとして、一応インターネットで事前に調べると発展場であるところも多い。大学院同期の住んでいる場所の話を聞くと、ヤクザがいるだの、学校から帰って来てマンションのエレベーターに乗ると、血がべったりなすり付けられた形跡があるなどの、ぞっとしてしまうような話も聞く。実際、繁華街から一本中に入った道に入ると風俗街が立ち並んでおり、風俗店の前には常に人が立っていて、呼び込みを常にしているし、夜中に歩いているとおじさんに声をかけられることも多く、全裸で雨の中を突っ立っていた、などの変質者に何度も遭遇している友人もいる。みなとみらいの偽物感とはまた違った怖さのある治安の悪い場所ではあるが、人間くささがあり、老若男女多国籍で賑やかなので昼間に歩くことはとても楽しい。

それらの街に比べて外国人墓地や教会、レストランやベーカリーが坂の上にある元町は落ち着いており、お洒落さの漂う街だ。このように、港町であるので、基本的に様々な外国人が昔から多く住む町だが、隣り合っている街同士の雰囲気はがらりと変わるので、どのような街・人・生活に焦点を当てたらおもしろそうか、歩きながら考えることにした。

1-3 ロシア好きなおじさんとの出会い（一部録音データ起こし）

いろいろとドラマがありそうな学校周辺の街なのだが、学校は海沿いにあるので、ひとまず海沿いを歩いてみてどんな人がいるのか、何をしているのかを観察していた。海沿いにはいろいろな人がいる。釣りをしている人や、犬の散歩に来る人、観光客等が毎日集まっている。しばらく学校付近の海辺を散策していたら、ベンチに座って一人でクロスワードパズルを始めたおじさんがいたので、話しかけてみたが無視をされた。シャイで頑固そうなおじさんだったので何を話しても無駄だと思い、その場を立ち去り、またしばらく周りを観察しているとカップルや親子連れがやってくる。普段よく見ている光景であり、なんの違和感もない。私は違和感を求めている。

この平和そうな場所に見切りをつけて、移動をしようと海辺から歩道へ歩いていこうとした時、楽しげな表情で、自転車を立ち漕ぎしているおじさんが彗星のごとく目の前に現れた。そして、坂道だったので一瞬で坂を下り、通り過ぎていった。

何が他の人と違ったのか、一瞬だったので、何にはっとさせられたのかわからないが、この人だ！と思った。服装は至って普通の白いカッターシャツに下はグレーのスラックス、整った顔立ちで若い頃はモテていそう。色が黒く、髪の毛は白髪と黒髪が混じりグレーだが、スポーツ刈りをしていてさわやかな感じだ。顔の艶も良く、目がキラキラと輝いているように見えた。ちょうど昼間の太陽の方角にいたからかもしれないが、その時とにかく目を疑うほど体から光を放っているおじさんが突如目の前に現れたので、思わず二度見をした。そして、考える間もなく私も元来た海の方に走っていった。

おじさんは坂道を下り、大きな自転車を止めて荷物をがさごと探り始めた。よく見るとおじさんは大量の荷物を自転車に取り付けていた。前輪のかご、左右のハンドル、後ろの荷台にもバッグやら何やらを取り付けていた。

ひとまず、おじさんが荷物を卸し、落ち着いて座るのを待ち、話しかけた。おじさんは笑顔で対応してくれたので、そのまま話を続けることにした。おじさんは政治の話が好きだった。今の政治がどうだとか、そして昔の知識人の話や読んだ本の話など、知識の幅が

広い。しかし、いつまでもおじさん本人の素の状態が見えず、何かバリアを張られていることはわかったので、私自身の話を始めることにした。出身地方や、大学院に通っていることや、今制作で悩んでいること等を話した。名古屋出身だと言うと、名古屋の結婚式はお金かかるよね〜という話題になり、宗教とかなにも関係ないのに、めでたさだけでお金を使ってしまうことの怖さをおじさんは話していた。

制作の話になると、おじさんは美術の話題も好きらしくった。東京藝術大学創始者の岡倉天心の話から始まり、私がどのようなものを作ろうとしているかに興味を持って聞いてくれたが、まだ何も決まっていないためにネタ探しで町の人にインタビューをしているので、おじさんのこと、何でも良いから話してくれと大変失礼極まりない願いを言うと、「今しかないよ、俺は」と言い、「気がついたら捕虜収容所に入れられてたからね。第一時世界大戦中のロシアのね。とりとめの無い話よ。あなたたちとは時代が違うんだよ。辛かったんだよ。ロシア語、わかる？」といって「ズドラーストヴィッチェ！」というロシア語を教えてくれた。

もっと詳しく聞きたいと言うと、おじさんはあきれた様子で、「やっぱ作ることに向いてる人ってのはいるよ。そういう人ってのはどんどんやりたいことが湧いて来てき、間に合わないくらいなんだよ、きっと。制作するには、やはりひらめきがある人じゃないと向いていないよ。じゃないとこの先苦しいよ。困ったなあ〜とか言ってる人は向いてないよ。作りゃ良いじゃん」と言った。そして、カバンの中からレトルトのごはんを取り出し、さらにビニール袋から出した冷凍の餃子を置いて、ベンチの上に置き、日光で溶かしながら、また世間話が始まった。

私は、最近住んでいる家の大家さんが神経質すぎて怖いので、引っ越しをしたい、という話をするとおじさんは突然最初に出会ったときくらいに目を輝かせながら、「俺も探してるんだよ！家！」と言いながらレトルトのカレーをかけ、生卵をベンチで割り入れて食べ始めた。おじさんの白いシャツのそではすり切れていた。「じゃあ、街の案内ついでに家を探しにいかうか？」とノリノリな調子だ。ソ連時代からロシアの現在までの話を聞いたり、夕方までだらだらベンチで話していたらだんだん寒くなって来たので、歩くことにした。ちょうど桜の花が満開となっているので、花見をしながらおじさんのおすすめの街を案内してもらうこととなり、アベノミックスの話をしながら、伊勢佐木町の方へ向かった。

花見や家探しの前に、おじさんは本屋が好きらしく、いくつかの古本屋に立ち寄った。おじさんおすすめの本、『星座入門』『ジャンケンポン協定』『細菌の脅威』『火の車板

前帖』『荒田西洋料理 3 オール・ドゥーブル編』が各 100 円だったので買ってくれた〈図 1〉。おじさんの興味は多岐にわたる。



〈図 1〉 おじさんの買ってくれた本

歩きながらおじさんの好きなものを聞くと、「なんにもないよ、なんにもできなくていいよ、ぼやっとする時間があれば、それで十分。人間って、何かやったらすぐ時間経つから、その間の時間って無くなるんだよ。自分のメンツをたてようと思ったら時間はすぐに無くなっちゃうよ。目が覚めたら、会社しか行くことがない、で、言って終わり。それで幸福ぶってどうすんだよ。何にもしてないじゃん」と笑いながら言った。おじさんにはどのような過去があるのだろうか、過去に何かあったのだろうか。お金と時間に追われるこ

とよりも、最低限の時間でお金を稼ぎ、あとはのんびりすることを選んだおじさん。

桜並木の広がる大岡川に着く。大岡川は海とつながっている。川の周りには桜並木が果てし無く続き、みんなシートをひいて花見をしていた。河沿いには歓楽街が多いため、ゲイバーで働くお姉さんたちが 30 人くらい長い机に座って花見をしているので迫力があつた。横を通る人は風俗店の女の子に呼び込みをされるのを回避しながらすすまなければならない。「ここ、いいでしょ？バカ男連れてきなよ！」とおじさんは言う。何故かには私にはとても馬鹿な彼氏がいるという設定になっているみたいだ。「北九州のね、紫川のあたりもこんな感じなんですよ。」おじさんはしみじみと言った。おじさんは 8 歳まではロシアに住んでいた説と、北九州に住んでいた説がある。その後、東京に移り住み、横浜にきて 20 年くらい経つらしい。「福沢諭吉が言ってたよ、友達なんて必要ないと。一人の方が有意義でしょ？無駄だね」と言いながら話してくれるおじさんに疑問を感じた。とても楽しそうに話してくれるからだ。人と話すのは好きじゃないのかと聞くと、「話すのは別に好きじゃないよ。でも大ボラを吹くのはすきだよ。圧迫をバックーンとはねのけたいからね」

その後、おじさんが普段利用しているという 500 円カットの床屋や、古本屋、途中、屋外にある 100 円ロッカーから荷物を取り出し、いくつかの不動産屋や、歩きながら見つけた優良物件などを案内された。おじさんは本が好きなので町中の古本屋の店主と知り合いである。3 軒目くらいに入った本屋のお婆さんが、ここら辺の家に詳しいと言うので、ここら辺に良い家がないか聞いてこいとおじさんに言われた。てっきりそんな突拍子も無い質問をさせるくらいだから、仲が良いものかと思い聞いてみると、「不動産屋に聞いた方が早いですよ。」と怪訝な調子で言われてしまった。外を見るとおじさんが本をあさっている。次に、普段フリーWi-Fi を利用しているホテルに案内された。おじさんはホテルに入ると新聞を読み、そしてビニール袋からポーチを取り出し、スマートフォンを取り出した。おじさんのスマホは 1 万円で買った台湾製で、電話料金は払っていないが、町中の FreeWi-Fi の場所を知っていて、ここら辺だとこのホテルと象の鼻公園がいいらしい。

「LINE っていいよね～絵だけでさ。会話するのとかめんどくさいじゃん。instagram ってやってる？やったら？俺はさ、やめちゃったんだよ。登録しなさいって言うてくるから。登録しなくていいんだったらやるんだけどね。facebook ユーザーが 10 億人で、LINE ユーザーは半年で 4 億人になったってゆうんだから。google も焦ってるんだよねえ」等と

言って SNS を始める。そして、プラウダというロシアのニュースサイトを紹介してくれた。日本のニュースサイトよりも外国の写真家の撮るものの方がかっこいいらしい。そして、ロシア語がさっぱり読めなかったのでぼうっと見ていると、「読めるよ、よ〜く見てごらん。ロシア語は、よ〜く見てると英語になるから。ドイツ語と一緒にすよ。」と言った。ふざけているのか本気なのか、本当にわからない。それでもおじさんは読めている風だった。

ホテルを後にして、かなり疲れてきた頃、これからまだまだ長いから！といってスーパーマーケットの上のトイレに連れて行かれた。女子トイレはかなり混雑していたので少し時間がかかったが、ちょっと疲れたので、飽きていなくなったらいいな〜…なんて思いながらトイレを出ると、おじさんがいない。二階の衣料品売り場を一周したがいない、エスカレーターで下に降りて薬局、食料品売場も一周したがいなかった。まさか置いていかれたのかと、びっくりしていたら、突然おじさんが現れた。作品中の言葉は、ほとんどおじさんが本当に言った言葉であり、このシーンは最初は以下の言葉が入る予定だったが、突然説明的になり、わざとらしく思えたので省いた。

「ウソは、現実を拡張させるためにある。つまらない現実よりも、面白いやろ？」

これはおじさんではなく、数年前に友人に実際に言われた言葉だ。その時の私は、確かにそうだ、と思った（今は嘘は嫌だなんて思っている）。

伊勢佐木モールから移動して、横浜橋商店街へ入った。伊勢佐木モールよりも店と店が密集し、八百屋や肉屋、魚屋、中国や韓国の総菜の店等が建ち並ぶ。おじさんに案内され、中国人の家族が営む、開け放たれた何でも屋のようなところに入る。私はそこで、安い野菜や、饅頭を6つ買った。木になっているそのままの形のような一房に大量についたバナナが100円で売っていたので、学校に持ち帰って一本100円で売って設けようかとも考えたが、荷物になるのでやめた。こんな活気のある商店街を知らなかったので知れてとても嬉しかったし、それからはちょくちょく買い物に出かけている。入口の天井屋に行ってみたい。

横浜橋商店街を出て、道路添いを歩いていると、柴犬の子犬を連れたおばあさんがやってきた。

おじさんは、「どうも、久しぶりだね〜元気？」といって犬を撫でようとしたが、おばあさんの、「最近この犬が死んだのよ」という言葉で手が止まった。

「一回死んだんだけど、生き返って、そしたら性格が変わったのよ」とおばあさんは謎

の発言をし、立ち去っていった。おじさんの話によると、あれは子犬に見えるが実は 10 年以上前から飼っている老犬で、どちらが先に死ぬか看取れるかといったかんじだそうだ。

不気味な気持ちで伊勢佐木モールにまた戻ると、「ここのね、服屋がね、安いんだよ。たまにロシア人の女の子とかも買いにきてたりしてね。いいでしょ？入ってきたら？」と、リサイクルショップを指差す。おじさんは自分では入らずに、人に入ることをばかり勧める。そして大通り沿いのサミットに入り、酒を飲まないか？と飲酒の提案をされたので断ると、手持ちの栄養ドリンクの瓶に入れている強そうなお酒をクイッと飲み、いつ開けたかわからないブラジルで買ったというバナナ味のクッキーをくれた。おじさんは拾った銀杏をスーパーの電子レンジで温めて食べたり、たまに道路に寝たりもしているという。そして、お昼の二時頃になると万国橋の海辺のベンチでのんびりするのだという。

最初は自分のことを話したがらなかったおじさんだが、歩いているうちにどんどん饒舌になり、心が打ち解けていったように思う。だが、話をよくすればするほど、どこまでが嘘か本当か最後までわからなかった。全て小説の中の話をそのまま話しているような気もするし、全て経験しているようにも感じた。

その日一日を知らないおじさんと過ごして、とても不思議な感じだが、自分とは違う年齢、性別、生活の人と突然何の準備もなくデートをすることは面白いなと感じた。普段の自分の目線では無い部分が見えてくるからだ。自分以外の日常に突然介入することは、覗けなかったものを覗けているようで楽しい。また遊びにいきます！と言ってから制作等で忙しくなり、遊びにいけていないがたまに移動中の海辺でばったり会う。この前名前を聞かれて教え、そして私も名前を聞いたが忘れてしまった。おじさんの名前は知らない。

それ以上、お互いにお互いを干渉しようとは思わないが、どこかお互い自分とは違うものを求めているのでつい話してしまうのでは無いだろうか。それはちょっとした旅のような感じでもある。その、ちょっとした旅を、この作品を見てくれた鑑賞者にも味わってもらえたらいい。

1-4 いろいろなおじさんとの出会い

釣りをしている人は多い。赤レンガ倉庫前や、学校のある万国橋その他、観光スポットであってもなくても釣りをしている。以前、万国橋で釣りをしているおじさんと話をすることがある。そのおじさんは夕方になると釣りをしにくるそうなのだが、それ以来見かけない。一番釣れるのは、万国橋の下、赤レンガ前、みなとみらいの横浜コスモワールド前

の海がよく釣れるらしい。横浜ベイスターズの大ファンで、横浜スタジアムには毎日通っている。その日もこれから全国高校野球選手権大会を見に行くと言っていた。私はその時、蛍光黄緑のランニングシューズとオレンジ色と水色のボーダー柄のワンピースに赤い大きなリュックサックという派手な出で立ちだったのだが、服装をまず褒め、どこ出身だい？と聞かれたので、愛知県と答えると、愛知県で野球の有名な高校の名前を出される。それがたまたま私の母校だったので、また話は盛り上がってしまう。

そして、そろそろ野球始まるから！と行って去っていった。名前を聞いたが忘れてしまった。

他には、犬の散歩をしている人も多い。近所に住んでいるとは考えにくいので、おそらく少し遠くから車で来て、駐車場に入れてから海辺を散歩している人多そうだ。

ホームレスも多い、学校の下や、学校前の海辺のベンチで寝ている人を一年中見かける。

ある日、学校前の海辺で「ズドラーストヴィチェ！」の資料となる写真を録っていると、風貌が明らかにホームレスのおじさんに話しかけられた。おじさんは海辺の木の下芝生に段ボールをひいており、食料や、本などを置いている。段ボールのシートの前に新聞紙が何かをかぶせているようなもっこりとした状態で置いてあった。そこを覗いてみると、赤い色が見える。血だ。これは何かと聞くと、釣った魚だと言う。新聞紙をどけてくれて見せてくれた。魚はかなり大きく全長 40cm はあったと思う。食べるつもりは絶対無いだろうと思われるほど、いつ釣ったかもわからないぐったりとした魚の死体で、ハエがたくさんかっっていた。

ひとまず座りなさい、と段ボールの切れ端を 1 枚渡されたのでひとまずその上に座る。するとおじさんは、カバンから一眼レフのカメラを取り出し、その性能についてのうんちくを語り始めた。先ほどの私は三脚を建てて写真を撮っていたのだが、その駄目だしをまずされ、露光量や被写界深度などの説明を一通りされる。そして、おじさんが撮った画像をたくさん見せてもらった。それらはすべて、この万国橋の海へ沈む夕日の写真だった。おじさんは毎日ここで夕日の写真を撮っていると言うのだ。カバンから一枚の現像された写真を出してみせてくれた。それも夕日の写真だったが、他のものと違ったのは雨の中での写真だった。雨に反射した夕日は美しくとても幻想的だった。「この写真は高く売れる」とおじさんは言う。だが、あまり人に見せびらかすと、「悪い人間に盗まれる」と言った。

今までも盗まれたことが何度かあるらしい。そしておじさんは、有名新聞社の部長の名刺を取り出した。ここら辺の写真を撮って、記者として取引をしているらしい。外国人に

もよく写真を売ると言っていた。そして、この横浜付近のお店の割引券つきの地図と、日高屋の割引券を20枚ほどくれた。「これさえ持っていれば、記者ってことで、顔パスだから」と言われた。

何が現実なのかわからなくなってしまった。もっともらしく言うのだが、風貌からまずそのような想像ができない、ということもある。そして、こちらの顔を見てくれないし、話をちゃんと聞いてくれない…このおじさんは何を考えている…？この街にはいろいろなおじさんがいる。おじさん以外もいっぱいいる。鑑賞者に距離を感じさせすぎてもわけがわからなくなるし、近すぎても発見が無い。その適度な距離にちょうどいたのが、「ズドラストヴィチェ！」のおじさんだったのだ。

1-5 家を探しに行くこと、家に不満を持つこと

ちょうどこの修了制作の題材にする前に、いくつかの自分の好きな原作ものを思い出していて、アニメーションにしようかと悩んでいた。それらは何故か、不思議と家にまつわる話が多い。実際、私は今住んでいるアパートに不満があり、ずっと引っ越しをしたいと考えていたためかもしれないが、それら原作のことが脳裏にあったために、おじさんと“家を探す”と言うキーワードに余計に惹かれたのかもしれない。

一つは、鈴木三重吉著『岡の家』だ。この話は幼少期に、父がよくしてくれた話だ。いつも休みなく働いている貧しい百姓の家の息子が、毎日たった一時間だけ休みをもらうと、決まって岡の上に行き、遠くの岡の上にある金色の窓のついた家を眺める。ある日、父に呼ばれ今日はごほうびに一日暇を上げるからどこへでもいっておいで、と言われ、いつも見ている金色の窓の家を目指して出かける。すると、たどり着いた先の家もまた、貧しい百姓の家で、はまっているのは金の窓でもなんでもなく、普通のガラスの窓だった。そのことをその家の女の子に言うと、その女の子も向こうの岡の上、男の子が来た方角の岡の上に金の窓の家がいつも見えるという。「私は、じぶんたちのこの家にも、金の窓がついているということを教わってきました。」（「鈴木三重吉童話集」より）

道徳的な話だが、これに似た事象はおじさんと家を探している間にも起こった。いろんな家を見ていると、今の家とそんなに変わらないかもなあ、引っ越す必要ないかもなあ、と思えてきたのだった。そして、ちょうど『岡の家』を思い出した。同時に、出会った瞬間の輝くおじさんの顔も思い出した。

もう一つは、舞城王太郎著『みんな元気』だ。これは一年次制作の企画や、大学院に入

る前にやりたかったこととも共通する点が多かった。主人公の妹が、空飛ぶ一家にさらわれるという話で、空飛ぶ一家の家族と勝手に妹を交換させられる。空飛ぶ一家は家ごと飛ぶので探すことが大変だ。この物語は時系列が行ったり来たりし、今以外の出来事はもう順番すら違い、何が本当だったのかわからない。常にたくさんの可能性が枝分かれし続けていて、同時にいろいろなことが起こりうる。パラレルワールド的な世界感が魅力的な物語で、これを映像で上手く作り出せたら、おもしろそうだなあと思っていた。そして、それらは一年次制作の『黄色い気球とぼんの先生』の気球と、パラグライダーという枝分かれたパラレル世界とも似ているのだが、“家”を探すという今回のキーワードにも引っかかる。強く意識した覚えはないが、無意識に、家を探すということに引っかかっていたのかもしれない。

家という箱についての不安は昔からあった。幼い頃、母の趣味で何回もマンションの引っ越しをした。幼い頃の若い母はいつも良い家を探していた。真夜中に車でいろいろな家に連れて行かれ、真っ暗な車の中で何度も待たされたこともあり、家探し＝不気味なことという印象が私の中にある（後々母親にその話をしたときに、真夜中じゃないよ！夕方だったよ、と言われたが、幼い私にとっては真夜中と思わせるほどの不気味さがあった）。そして、一人っ子で、家を継がなくてはいけないのが自分だけであったために、地面に土地のついていないマンションで暮らすと言うことはとても不安定な気持ちであった。いくら高くても良いマンションを購入したといっても土に根付いていないマンションに一生永住できる訳がないと思っていた。空に浮いた土地が、親が死んだ後も手元にある訳がないと思っていたし、空にある体と共に心もぐらぐらと浮いている気がした。さらに、小さい頃から見ると怖い夢は、自分の家が分からなくなる、住宅街のどこからも見つけられなくなる、というものだった。その夢の中の住宅街に今住んでいる住宅街がよく似ているので余計に引っ越しをしたいと思う。

この「家探し」というキーワードはアニメーションにする上で削ってしまった。理由は唐突すぎて訳の分からなさが一気に増すからだ。だが、私の中ではこの部分はたとえ作品に入っていなかったとしても大事な裏テーマであるので、いつかもう少し“家探し”がテーマとなった作品も作りたいと思う。

1-6 ロケハン、スケッチ、リサーチ

この作品は、生っぽい部分と嘘っぽい部分の混ぜ込み方が重要だと思っていたので、リ

アルさどう出すかをずっと考えていた。カメラとスケッチブックを片手に、何度も街や海に出かけた。そんなときにも様々なおじさんと出くわす。

伊勢佐木モールでスケッチをしていると、白いランニングに、ズボンのチャックが全開のお酒のにおいを漂わせる、「THE アル中」のようなおじさんに話しかけられる。いつまでも話しかけられ、スケッチもいやになってしまうほどだったので、それ以来スケッチをしていない。とにかくこの街には怪しげなおじさんが多いことはわかった。人にどう思われるのかをあまり重要視しない、その場しのぎの感じが、嫌だなあと思う面も多いのだが、共通していることはみんなものすごく楽しそうだな、ということだ。人社会からは隔離されているような気もするが、この世に存在する自分自身がそのまま目の前に広がる世界に自然に身を委ねているような印象を受けた。そんな人もたくさんいるこの街を、どのようにしたら生々しく表現できるのか、迷っていた。

スケッチはやめたが、ビデオカメラを持っでのロケハンは何回かした。作画自体にそれを参考にした部分はあまり無いが、自分の中に印象を植え付けたいと思っていたからだ。そしてその時撮影したものを、実写素材として使用をしたり、音声だけ使用したりして生っぽさを演出した。

海辺が舞台なので、海へのロケハンも多くした〈図 2, 3〉。ただ、学校付近の海辺では絵として味気ないので、舞台はちょっと田舎の賑やかな海水浴場という設定にした。参考にした海は、三浦海岸や、鎌倉の海だ。



〈図 2, 3〉 三浦海岸

1-7 現在の環境に身を委ね作品を制作すること

作品に海が出てくることはとても自然だ。

不思議と同期の作品にも水の出てくる作品は多い。石谷恵『かたすみの鱗』、澁谷岳志『Holy Shit!』、春成つむぎ『Tepid Bath』, 米谷聡美『白いうなばら』、山羊『糞』等。

無意識の領域で毎日教室や作業スペース、トイレなどから見えるなみなみとした水、海をみているために少しは影響されているのではないだろうか。作品作りが今現在の自分たちの生活と密接に関わっていることはとても自然で、今しかできないことであり、とても大切にしたいと思う。アーティスト・イン・レジデンスなどで各地で制作拠点を移動しながら制作することにも興味を惹かれる。そして早く引っ越しがしたい。

1-8 ドキュメンタリーについて

作品を自分以外の場所やニュースからもってくることは、『The Black Dog's Progress』を制作したステファン・アーウィンにインタビューをする機会があったことが大きく影響していると思う。

どんなに恐ろしい物語よりも、実際の人間の方が怖いし、面白い。ニュースやテレビにはネタがたくさんある。そして、自らが介入してリサーチすることはとても需要だと感じる。その場でしか味わえない空気、奇跡のような偶然は自分にしか起こせない。起こってしまったエラーさえもおもしろおかしく受け止めて作品にできたら、そしてそのような生き方ができたら良いと思う。

1-9 制作の進め方

まず、シナリを書くことから始めた。シナリオを書いた後は、タイミングをつかむためや、文語調になりすぎないようにするために、実際に声に出してみte録音をする。それをAfterEffects上でタイムラインに並べ、絵を配置していく。

おじさんのキャラクターデザインは最初、最終的な顔よりもシュッとしたイケメンだった。だが、頼んだ声優さんの声が下膨れの顔だね、もう少し顔を丸くした方が良いよ、と山村先生から指摘を受け、デザインを変更するなどして、その都度デザインや美術は音声が決まって来ると共に変化していった。

カットごとにその都度あう手法を変え、クレイや作画、切り紙等様々な素材を用いて撮影をした。ストリップの死体の話等、ニュースとしては暗い話もあるが、おじさんの生きている世界を暗いものにしたくなかったので、天国のように周りに花が咲き、きらきらとした川を人形が流れていくというカットにした。

絵コンテをあまり描かないので、毎回1カットが終わると次が白紙の状態を考えなければいけないことがストレスとなったので、絵コンテは大事だなと思った。

第2章 一年次制作『黄色い気球とぼんの先生』

2-1 制作のきっかけ

学部の卒業制作、『バリカン』を経て、いつでも好きなときに見ることができるインターネットでもなく、つまらないと感じれば立ち去ることのできる展覧会場でもなく、映画館という人の時間を無理矢理にでも拘束する場所で上映するには、なにかその時間に見合ったものを得られなければならないと感じるようになった。人に見てもらうための親切さ、エンタメ要素などの必要を感じた。

そこで、出てきた回答が単純に、最初と最後を提示すること、物語を使用することであった。

私は自分の幼少期、大事にしてきた少し不思議だが、そこまで奇天烈でもない、子供によくある嘘なのか本当なのかわからないが確かに本当だった素朴な記憶をシナリオに使うことに決めた。

2-2 取材

10数年ぶりに母校の小学校に取材に行った。実際に入ってみると、記憶や想像では忘れてしまっていた出来事や匂いを場所によって鮮明に思い出すことができ驚いた。理科室に入ったときに特に驚いた。匂いが全く変わっていなかったのである。そして、変化したものも色々あった。私が美しく、にぎやかな場所だと思っていた岩石園のピンク色のタイルでできた床、黄色い屋根のあるベンチの色は褪せ、金魚やタニシ、いろいろな生き物が住み、美しく青い藻があった池の水は抜きとられていた。そこでさらに昔の記憶は何か夢や幻だったのかと思えるほどさらに美しくなった。

2-3 記憶の曖昧さ

私たちの記憶はとても曖昧で膨大だ。

自分の記憶には、いつの間にかそうだったと思っている幼い頃の不思議な思い出や夢、みんなが知ってる物語、アニメ、人から聞いた話、テレビのニュース、適当に思いついたこと等が混ざり合い、どこまでが自分の体験で、何が嘘か本当か、順番すらわからない。それら全てをひっくるめてファンタスティックな自分の記憶にしている。同じ世界や時代に生きた人々とも知らぬ間に共有している記憶、それらは自分のものであり、他

人のものであり、また、自分のものでもなく、他人のものでもない、境目を見つけることは難しい、大いなる記憶だと私は考える。

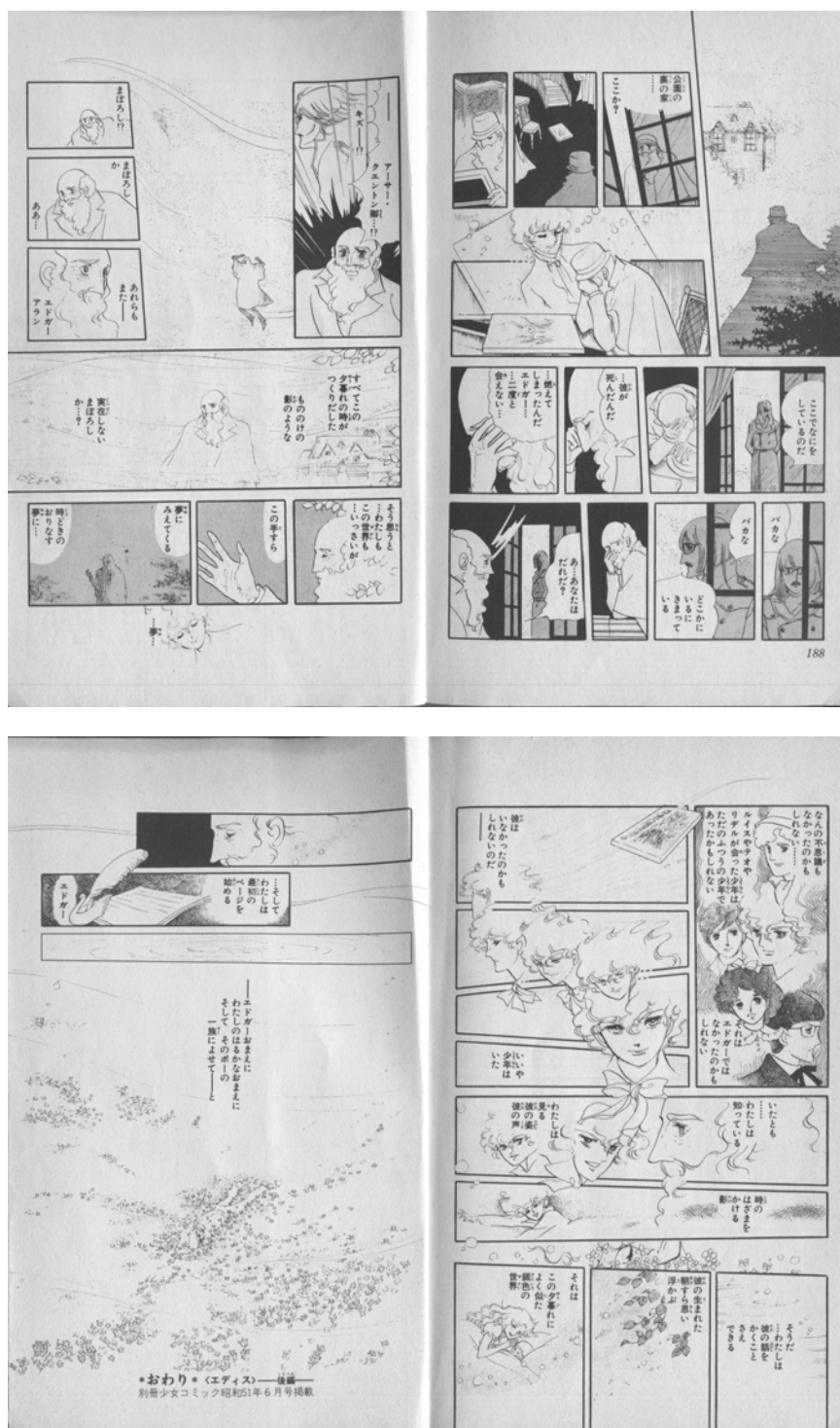
『黄色い気球とぼんの先生』『ズドラーストヴィチェ！』に共通して言えることは、人の記憶の曖昧さ、不確かさ、普遍的な無意識の存在だ。

私の影響を受けた作品として、まず萩尾望都『ポーの一族』が上げられる<図3>。

記憶の儚さは、幼い頃、母の書棚にあった『ポーの一族』を読んだ時からずっと怖いと思っていた。大人になって忘れていくこと、一人で生き続け、時代を超えていくこと、忘れられていくことの寂しさがある。

『ポーの一族』は全5巻からなる吸血鬼一族のエドガーが家族や仲間を失いながらも何百年も生きながらえるという話だが、マンガの構造として時系列がばらばらに行ったり来たりしている。長い間生き続けるバンパネラにとって10年は一瞬で、記憶も薄らいでいくうえに連載順も時系列ではないので、読んでいて、全てが幻だったかのように感じてしまうが、確かにあったかもしれない記憶、そして時代を超えて様々な人の脳裏に焼き付くエドガーの記憶がある。そのエドガーの存在は、ユング心理学における集合的無意識の概念と同じものなのではないだろうか。

私の見た「黄色い気球とぼんの先生」、フクシマアヤちゃんの見た「黄色い気球」、ユキちゃんの見た「黄色いパラグライダー」という、「黄色い空飛ぶ何かが確かに学校にいたこと」とエドガーの存在はとても似ていると思う。黄色い気球はエドガーだ。



〈図3〉『ポーの一族』ラストシーン

舞城王太郎『みんな元気』を読んだ時も、自分のやりたいことに近いものを感じた。

今以外の出来事はもう順番すら違うし、常にたくさんの可能性が枝分かれし続けていて、同時にいろいろなことが起こりうる。パラレルワールド的な世界を映像で上手く作り出せたら、おもしろそうだなあと思う。

結論

修了制作は突発的に出て来た物語なので、この話が面白いのか、他人が見てどう感じるのかがずっと不安だった。一年次制作の物語内容は今まで抱えて来た話というのもあり、自分の中で噛み砕けていたのだが、修了制作では、それができているかどうか最後までわからなかった。だが逆に、一年次制作ではできなかった画面作りはできたと思う。ぐっと素材自体が迫るような生々しい画面が私は好きだ。例えばヤン・シュヴァンクマイエルの作品はどれも素材の質感が生々しく、木材や、金属を写したとしても、まるで生きている何かの肉を写しているかのような生々しさがあって、心地よい。それらはもともとの素材に加え、照明や、絵のリズム音楽によって余計に際立つ。そのような画面作りにしたいと常に思っているので、スキャンをして光が均一な状態で絵を取り込むことはあまり好きではない。できればただの作画用紙だったとしても撮影をしたいと思っているが、一年次制作ではそれができなかった。修了制作ではその部分はまだ挑戦できたと思う。

謝辞

2 年間、作品に関わって頂いた方々に全てに本当に感謝しています。二年間サウンドデザインを担当して頂いた音楽環境創造科の滝野ますみさんは、私の煮え切らない指示をいつも的確にすくいあげてくれました。一年次音楽の、阿部壮志君の速くて柔軟なレスポンスにはとても助けられ、修了制作音楽担当の窪田薫さんには、アレンジの効いた素敵な楽曲をいくつも作って頂き、届くたびにわくわくしました。無理を言って外ロケと役者さんへのスケジュール管理をしていただいた映画専攻の原田響さん、録音を担当してくれた伊東俊平さん、キャストのみなさんにはご迷惑かけつつも助けられました。そして、なにより、ゼミの山村浩二教授からの絶妙なタイミングでの GO サインにはいつも勇気が湧きました。教授のおかげで、のびのびと制作をすることができました。ゼミによっても雰囲気や話の論点は変わり、オープンゼミもとても楽しかったです。様々なご意見を頂いた、布山タルト教授、岡本美津子教授、伊藤有壺教授、音のご相談に親身に乘って頂いた、高山博先生、岸野雄一先生には本当に感謝しています。日々のケアをして頂いた村上さん、仲良くしてくれて、小さな相談にもすぐにのってくれたゆえんゆえんさん、ギャグのおもしろいハケンさん、笑顔の素敵な河野さん、感謝です。そして何よりも六期生のみんながいたからこそこの作品です。様々な作風、手法の六期、日々大切にしていることも違い、意見の

食い違いやけんかをすることもありましたが、多大なる影響、刺激を受けました。この大学院に2年間通ったことは、間違いなく大きな財産です。これからも良い作品ができるようにがんばりたいです。そしてみんなの作品もこれからも見たいです。

本当にお世話になりました。ありがとうございました！

制作記録「ズドラーストヴィチェ！ / Zdrastvuite!」



東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 3212259

幸 洋子/Yoko YUKI

指導教員 山村 浩二

2015年3月16日



『ズドラーストヴィチェ!』素材作り



『ズドラーストヴィチェ!』アニメート、撮影

